

第二期 第四十一号 (二版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2019.12.20 定有堂書店 発行

## 初発衝動

奈良 敏行

(定有堂 店主)

### 初発衝動

東京支店 かねて閉店

そこには独自の池がある

久しぶりに図書館つれづれ

坪井日記 ②③

おおきな そつこが ほしい

遊歴と算家の汽水域 数学戯評の解説

再び幻の映画を尋ねて (前)

鹿野は私のふるさと

鳥取あれこれ その四十

蒼のノクテルヌ

書くことについて書かれた小説

クリムトとあんかけスバゲティ

春の帽子

…… 編集後記

奈良 敏行

萩原 俊郎

ワクサカソウヘイ

吉田 海将

齊藤 仁昭

鳥居 貴彦

芝野 浩貴

ムラカミヒロミ

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

古賀 啓三

あきの素生

ドラメラア



十一月二七日、「知のカフェ」主催の会に招かれて、鳥取大学で、「『本屋』の仕事」と題した、「本屋トーク」を行なった。

「本屋トーク」というのは、①学び系だが結論をつくらない②本の中身より本を読む人の話、といういつもの店頭でのやりとりを再現するものだ。きっかけは、学生が先生にすすめられて本屋に顔を出し、でも本屋の人に声をかける勇気が出せなかった、という話を耳にしたからだ。もし声をかけていたら、どんな対話があっただろう、と出張トークを行なったわけだ。

本屋は本が好きの人がやっている。「屋」というのは「もつぱら〇〇」と熱中しているという意味だ。ここでは、もつぱら本に熱中している人だから、「ブックキッシュ(机上の空論)」な人ということになる。熱中したあまりその勢いで本屋となる。この「勢い」のことを「初発

衝動」と名付けてみた。これが一つ目の話だ。

「小商い」は、初発衝動で始めるものだ。だからこの初発衝動という物語の上に、それぞれの本屋の商いがある。

もう一つは「十年説」だ。初発衝動つまり個性で始めたものには賞味期限があり、ほぼ十年という話だ。定有堂書店は四十年つづくので、ほぼ十年周期で「個性」を切り換えてきた。長く続くということはそういうことのようなのだ。

学生や参加していた人たちの関心の多くは、この一点に集まった。

さてここからが「本屋トーク」で、ブックシシュな話となる。なぜ、個性を切り換えることができるのかというと、個性それ自身が「勢い」のものだからだ。配布資料には座右の銘も書き添えておいた。

《ものを考えるということの働きは、ことばを組み合わせる。文を作っていくという工夫のうちにある》（柳父章）

わたしがかつて師事した、翻訳論という学問を確立した人の言葉だ。わたしの初発衝動ともいえる考え方のオリジンだ。余談だが（本屋トークは本性上脱線する）今年の九月に立教大学で行われた日本通訳翻訳学会シンポジウムの「ブレ・カンファレンス講義」が「未来へつなぐ

柳父翻訳学」だった。再評価の機運が高まっている学者だ。若い頃長く在野の人だったが、その頃の弟子に本屋がいる、と興味を持たれ、会の冒頭に「定有堂書店 奈良敏行氏メッセージ」が事務局の北代美和子さんによって読み上げられた。お誘いも受けたがさすがに出席するには臆するものがあつた。

思念は「ことば」と「文脈」でつくられているという考えだ。つくられているのなら、変更することも可能なはずだ。ブックシシュな本屋の人間は、こういう道筋をたどって考える。

つくりの強固なもの、比較的ゆるいものと見ていくと、ブックシシュな引き合いだが、強固なものをドミナント・ストーリーといい、ゆるいものをオルタナティブ・ストーリーとする視点がある。

今日の店頭で常連の方が、うちの二十四歳の息子が今年就職して悩んでいる。職場で自信がもてない、自分を変えなければ、と悩んでいる。どんな本を読ませればいだろう、と会話がはじまった。「物語」は変えにくいけど「語り」は変えやすいというテーマの本がありますよ、「ナラティブ」という考え方です。少し専門的だと『ナラティブと共同性』（野口裕二）が最新の本ですし、息子さんなら『人はなぜ物語を求めるのか』（千野帽子）がいいですね、とすすめ、ついでに、自分を変革して生

きる人たちの「語り」を集めた『かかわり方のまなび方』

(西村佳哲) も付け加えた。

本屋の物語を「語り」によって少しずつ変容させる。

そのようにして定有堂はこの場所(レイヤー)にある。

いま現在の「語り」は「本のビオトープ」だが、それは

『音信不通』で現在進行中の「ことば」と「文脈」のことでもある。

2019. 11. 29

柳文章『現代日本語の発見』てらこや出版 1983

野口裕二『ナラティブと共同性』青土社 2018

千野帽子『人はなぜ物語を求めるのか』ちくまプリマー 2017

西村佳哲『かかわり方のまなび方』ちくま文庫 2014

## 東京支店「これにて閉店」

萩原 俊郎

(新日本海新聞社 元東京支社長)

つひに行く、道とはかねて聞きしかど

きのうけふとは思はざりしを

すべてはいつか終わりが来る。そう頭では分かっていたが、「ペイビー、それが今日だとは思ってもみなかったぜー」という在原業平の歌。

突然だが、東京を去ることになった。サラリーマンは植木等が歌うほど「気楽な稼業」ではない。自分の明日をも知れない身だ。赤の他人からいきなり辞令の紙きれ一枚で、暮らす場所も仕事の中身も決められ、家族から引き離されたり、戻されたりする。抵抗する手段はただ一つ……会社を辞めるしかない。分かっている、なんとも悔しく、もどかしいんだな、これが。

世の中を憂しとやさしと思へども

飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

どんなに辛くても「われわれは自由に飛び立つなんてできないんだよ、ローンもある、教育費もある、鳥じゃないんだから」

山上憶良の歌は、まさに1300年後のサラリーマンのうめき声を歌っている。憶良はあふれる文才と遣唐使としての国際知識を持ちながら、中央官界ではずっと冷遇され、ようやく遅咲きの国司として伯耆(倉吉)に着任したのは六十歳近く。どこか還暦目前にして東京に行かされた自分と姿がかぶるなあ。

伯耆のち筑紫の国司に転じた時は、もう六十六歳になっていたが、そこで大伴家持の父で当時、大宰師(大宰府の長官)だった大伴旅人との得がたい出逢いがあった。長官や知事(国司)といえば聞こえはいいが、要は時の権力者から疎まれ、都から下放された不遇な者同士。ともに優れた歌人であり、すぐに気心の知れる仲になったのは想像に難くない。

だが、「二人が筑紫でよからぬ話をしている」という噂でも都に届こうものなら、「すわ、中央への批判や陰謀か」とさらにヤバい処分が下される。畢竟、二人は文学Ⅱ歌の世界に向かうしかない。「筑紫歌壇」はその拠点となるが、落ちぶれたとはいえ大伴家の総領の旅人、じつと黙ってはられない。

◇ ◇ ◇

私の東京暮らしで最大のトピックスは「令和」への改元だった。だが半年経つても、「令」の字がなじめない。これを「令(よ)き」

と読むには、どうも無理がある。有力候補だった「万和(ばんな)」ならば「万民和する」世界平和」とすつきり収まるが、「令和」は何だか政府から「日本は古来から和を以つて貴しとなすだからな、分かつてるな」と命令されているような印象なのだ。

ところが「中国の原典より日本の国書」という安倍の浅はかな意図によつて元号の典拠にされたのが、よりによつて旅人、憶良の「不遇ヨンビ」による万葉集巻五「梅花の宴」の序文とは。安倍は「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」と談話を発表。たぶん、雲の上で二人は大笑いしているのではないか。

◇ ◇ ◇  
旅人が自邸で開いた梅花の宴、実際はどうだったのか、私なりに想像してみた。序文(宴の趣旨説明、呼びかけ)は、もしかすると漢文の得意な憶良の手が加わっているかもしれない。

「初春の令月にして、気淑く風和らぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす」。だが、いくら九州とはいえ「正月十三日(西暦で二月四日)」、梅を愛(め)めるには早い。「何を能天気なことを」。居並ぶ筑紫歌壇の面々(大宰府の官僚たち)は首をかしげたが、はたと気づく。「令月」と言えば、後漢の文人・張衡の『帰田賦』に『仲春令月、時和氣清』というくだりがあったな。それとも東晋の書家・王羲之の『蘭亭集序』の方だろうか」

当時の役人は中国の古典・詩文に通じていたから、『帰田賦』が「愚帝と取り巻きによる悪政には見切りをつけ、田舎に帰ろう」という内容であることは知っている。おりしも前年には都を震撼させた「長屋王の変」が起きている。

「きわどいけど、大丈夫だろうか」と心配する者、「さすが漢詩に詳しい旅人一流の当てこすり」とニヤニヤする者、あるいは「藤原一門をおちよくるとは。都に一報しておかなければ…」とひそかに書き留める者。

実際、旅人の周りには腹心のふりをして、せっせと都に密告して出世した人間もいた。

◇ ◇ ◇  
こうした見方は品田悦一(東京大教授の説で)存知の方も多からう。一方、「帰田賦とは無関係」と主張する学者もいる。ただ、時代は変わろうが、愚政がはびこり、自由にものが言えなくなつた社会では、詩や文学は「人々が美しく心を寄せ合う中で生まれ育つ」(安倍)のではなく、きわどい比喩で世情を当てこすり、権力者の愚行を笑い飛ばし、批判する手段や武器として成長する。

新聞メディアもそうかも、いや、そうあるべきと思う。くしくも梅ならぬ「桜を見る会」で矢面に立たされている安倍政権。「梅花の宴」で旅人が仕掛けた歴史のパラドックスに見事にはまった、と笑い飛ばしてやろう。

というわけで、私の「定有堂東京支店」はこれにておしまい。

## そこには独自の池がある

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

鳥取市街でリカーショップを営む谷本さんもまた、「痺れる」人だった。彼が経営する「谷本酒店」はまるでアールコールの熱帯雨林、瓶の中に満たされたお酒たちがひっそりと息をしながら、来客の者たちをじっと眺めている。彼が扱う日本酒やワインたちは、全員生きているのである。「地域の酒屋が潰れば、地域の酒造場が潰れる。酒造場が潰れば、米をつくっている農家が潰れる。そして最終的には土が枯れてしまう。だから酒屋は生きていなければならないんです」という彼の一言に、私は恥骨を震わせた。

その流れでお会した、若桜町の太田酒造場の若き社長、太田さんもまた色男だった。彼は若桜町エリアの五軒の農家とだけ契約を交わし、完全に地産で日本酒を製造している。売ろうと思えば、全国にネット販売できるのに、彼はそれをしない。顔が見える相手にだけ、取次や卸業を仲介させずに、直売している。売りに走らず、過剰性に走らず、それを求める変態にだけ酒を売る。循環を優先させる態度は、尊敬に値する。

トットリ界隈の外に目を向けた時、私にとって「痺れる」人物とは誰だろうか。まず、先輩筋にあたる漫画家にして映像作家の天久聖一氏の名前を挙げたい。もう十年ほどお世話になっている先輩なわけだが、彼と数年に一度、酒を飲み交わす機会を得るたびに私は全身に雷がうなった。

最近、トットリ界隈で「痺れる」人物たちに次々とお会いする機会が続いた。

まず、汽水空港のモリさん。松崎駅の近くで、セルフビルドの本屋さんをやっている方だ。先日開催された『曇天野外』という音楽フェスにて私は石を売っていたのだが（どういうことだ、と思われるかもしれないが、詳細は省く）、そこでモリさんも出店をさせていて、共通の知人を通じて邂逅を果たした。前からその存在の噂だけは聞いていたのだが、実際に会ったモリさんはなんとも色っぽい男性で、握手を交わした瞬間、私の腰は砕けそうになった。

落ちたような感覚を味わう。誰よりも優しく、誰よりも厳しい人物である。天久さんがいなければ、きつといまの私は存在していない。

文筆業の先輩である宮田珠己氏もまた、「痺れる」男である。紀行、ジェットコースター、いい感じの石ころ、変な形の無脊椎生物、迷宮のような旅館<sup>motel</sup>。彼の執筆範囲は実に節操がないわけだが、なのになぜかそこには「宮田珠己世界」としか呼ぶことのできない、有機的な秩序のようなものが透けて見える。会うたびに「金がないうよ」とぼやく宮田さんだが、本質的にはお金に固執していないところが宮田さんの魅力なわけで、その静謐な反社会っぷりには胸をときめかせざるを得ない。

年下の人物でいうと、ダ・ヴィンチ・恐山（別名・品田遊）氏も私にとってクリティカルな人物である。それから芸人の男性ブランコのみたりも。彼らが出力する小説やネット記事、ラジオにコメント、その他諸々は、常にこの世界の地上から数センチ浮いていて、まるで福音のようである。彼らもまた、尊い。

以上に名前を挙げた人物たちの共通項ってなんだろう。しばらく考えてみたところ、それぞれが「独自の池」を持っていることに気がついた。

汽水空港のモリさんに出合った時、「痺れる」のと同じ時に、心強さのようなものを感じた。ああ、いま目の前

には、私がつくっているのとはまったく別の生態系を保有している池が存在している。でも、このモリさんの池に集まるトンボたちは、たまに私の池にも飛んでくるトンボなのだろう。それって、とても心強い。

谷本さんにも、太田さんにも、天久さんにも、宮田さんにも、ダ・ヴィンチ氏にも、男性ブランコにも、それぞれ池がある。みんな、自分のジャンルで勝負している。もうすぐ2020年が終わる。今年が私個人にとってどんな年だったかと振り返るに、「自分の池をつくる」という観点がマクロに広がり、「他者の池と合流しながらより大きな生態系をつくる」という意識に変わった、転換期みたいな一年だった。

池を大きくしたい。汚れた水はそこには注がせたくない。ミクロとマクロを行き来しながら、痺れるような生態系をこの世に顕していきたい。その時、そこにどんなオニヤンマがやってくるのか、ひとまず来年がとても楽しみである。

# 久しぶりで図書館じゃいれ

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

があり、小林課長との会話も楽しみながら、久しぶりに図書館について考えた。

鳥取県は、来年度から県立図書館と県内の全市町村図書館で朝日新聞の記事データベース(DB)を導入し、共同利用を予定している。国内の図書館のDB導入は、ほぼ単館単位。このようなコンソーシアム(共同事業体)形式は、一定の数が参加すれば割安の料金でDBを利用できるメリットもあるが、海外では北米の大学、国内の公立高校などで事例があるが、国内の図書館では初めてのようなだ。

なぜ県立だけでなく、全市町村図書館と歩調を合わせての導入なのか。「どの市町村にいても、地元でDBをさせる環境が必要。その環境を整えるのが県立図書館の役割。県立の一人勝ちでは意味がない」と小林課長。県立だけに導入すると、例えば遠隔地の人はわざわざ県立まで足を運ばねば、DBを使うことが出来ない。図書館での情報へアクセスする環境で、格差をつくらずに全体的な底上げを図るといふ。

「県民が求めるあらゆる情報の検索」が目的だといふが、あえて想定する利用者例をあげてもらおうと、総務省の「地域おこし協力隊員」などがあがった。「都会の企業などで情報収集をしていた人などが、鳥取に来て地元の人と何かやろう、と言うときにぜひ使ってほしい」と

鳥の図書館の挑戦―。鳥取総局で記者をしていた二〇一三年秋、読書週間にあわせて、こんなタイトルの連載をしたことがあった。鳥取県立図書館を中心に、自治体図書館、書店、学校などの連携から生み出される豊かな取り組みに注目。私にとって最長の8回の連載となり、社内外でわりと好評だった。その際に、いろいろな知恵を貸してくれ、多くの取材先への橋渡ししてくれたのが県立図書館の小林隆志・支援協力課長だった。

十一月中旬、横浜市であった図書館総合展で小林課長に六年ぶりに再会した。司書ら図書館関係者を中心に、図書館と接点がある業者や企業、市民らが集い、三日間にわたった催しで、様々なブース出展やフォーラム開催



いう。今後は、DB活用に習熟した県立図書館の司書が、市町村立図書館に出向き、地元の司書と一緒にレファレンス対応するなどして、利用の促進をはかるという。

まじめな話を書いてきたが、驚いたのは会場での小林人気。司書や学者、業者……。一緒に歩いていると、あちこちから声がかかり、私にも名刺をくれる。講演などで全国に出向き、日々、他館の司書からの相談にも気軽に応じて培った人脈に圧倒された。長いスペインでじつくり仕事が出来た司書はうらやましい、と思ったが、自分も仕事で接点を持てたのだからまあ、よしとしよう。



図書館総合展では、福祉政策などで注目される兵庫・明石市の図書館政策や、岩波ジュニア編集長らが高校生向けの新書について議論したフォーラムなどに参加した。中でも、大串夏身・昭和女子大名誉教授によるレファレンスの試行錯誤を綴った名著の増補復刊を記念したフォーラムが面白かった。ライター・編集者の南陀楼綾繁(なんだろうあやしげ)さんとの軽快なやりとりでトークはすずみ、レファレンスの具体的な動きを記した本は、海外でもなかなか、ないようだ。

とりわけ興味を持ったのは、会場にいた、大串氏の同僚だったという現役の司書の方からの問題提起だった。現場のレファレンスでは、来館者の要望に応えるために、

まずGoogleで検索する「ググる」ことから始める事が多くなっているという。早い回答を求めるせっちな来館者も多く、時間をとると怒って帰って行く人も。大串氏が本に記したように、書庫やカードを使ってニーズに応える時間は、かなり減ったという。「もしかして、大事などころを抜かしているのではないだろうか」と、この司書は質問を終えた。

「ググる」ことは、必要な時代だと思う。けどそれは、あくまで情報を求める一つの手段にすぎない。図書館は市民に開かれた、生涯学習の一つの拠点であり、出合いがある場所であってほしい、と思った。

齊藤仁昭

(長崎書店)

10月某日

長崎書店と支店の長崎次郎書店を南陀楼綾繁さんに取材していただいた記事が掲載された『地域人』第50号(大正大学出版会、1,000円+税)が届いた。特集は「本屋が楽しい まちが楽しい」。鳥取、山梨、北海道、岩手、高知、熊本のさまざまな試みを行う書店が紹介されている。

当たり障りのないことしか言っていない私と比べ、鳥取の書店の層の分厚さに改めて感銘を受ける。定有堂も本の学校、今井ブックセンターに一度ずつしか訪ねたことではないが、いつも仕事をするときのひとつの指針とさせていただいています。本屋さん同士のつながりや、図書館など本にかかわる人との交流も盛んだと記事にあり、とてももうらやましく感じた。他所の書店や図書館、学校

などとの継続的なつながりづくりがなかなか難しいのです…。

表紙の絵が私に似ている気がするのだが、特に地域人の方には何も言われておらずわからない。取材時に撮影してくれた知人のカメラマンは絶対齊藤さんだよと言うがどうなんだろうか。

それはさておきとても良い特集なので皆さまぜひご覧になってみてください。

11月某日

坂口恭平さんの新刊『まとまらない人 坂口恭平が語る坂口恭平』(リトルモア、1,500円+税)が発売された。これまでの著作や活動を振り返る語り下ろし作品。ご近所ということもありサイン本を作り坂口さんご来店くださる。全国各地、結構な数の書店を回る予定だそう。

これまたご近所の書店である橙書店(こちらも地域人に掲載されています)の店主、田尻久子さんの新刊『橙書店にて』(晶文社、1,500円+税)も出たばかり。さらに

渡辺京二さんの新刊『夢ひらく彼方へ』（亜紀書房、上巻ともに1700円＋税）も10月末に発売されている。

どちらも良い本です。熊本の方々いい調子。売り伸ばしていききたい。

11月某日

友人の結婚式で演奏するため東京へ。ビーチボーイズの「And Your Dreams Comes True」という曲におめでとの日本語詞をつけて4声のコーラスでアカペラに挑戦。かなり怪しい響きになったが、めちやくちやに面白かった。コーラスにはまりそう。他の曲はチェロ、バイオリン、コントラバスとの演奏だったため音量のコントロールが難しかった。

11月某日

阿蘇山からの火山灰が結構飛んでくるせいか、鼻水がとまらない。車も数日で灰がうっすらと積もる。窓が傷つくからウォッシュ液からのワイパーはあんまりよくないと聞くが面倒くさくてすぐやっってしまう。

\*

坊や 誰も知らないような 誰も見えないような  
ものをみたのかい 気のせいさ  
坊や 海も煮え立ちそうな 森も動かしそうか  
声がしたのかい 気のせいさ

坊や 星も吹き飛びそうな 全てなくなりそうさ  
風が来たのかい 気のせいさ  
坊や 夢の合間のような まるで迷路のような  
夜が来たのかい 気のせいさ

ダンスダンス 踊る バウンスバウンス 弾む  
ダンスダンス 踊る バウンスバウンス 弾みそう  
くらくらするぜ ふうふうするぜ  
くらくらするぜ ふうふう倒れそう

坊や 空へ飛び出しそうな 羽も生え出しそうな  
気がしてるのかい 気のせいさ  
坊や 何も消さないでね どこも行かないでね  
君は魔女みたい 気のせいさ

（ケバブジョンソン「加速度」 作詞…杉浦真寛）

# おおきなそうじがほしい

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

在庫のことを考えている。古本は何十冊とまとめて買取らせてもらうことが多い。たとえば五千円で買い取った本のうち五百円で十冊が売れたらあとは財産だ。売ればうれしい。十冊売れるまではマイナスだけど。

新刊はどうか。新刊は支払いが遅いことが多い。本が先に入ってくる。ただ、十冊入れても支払いの期限までに八冊以上売れないと結局は出ていくお金の方が多い。九冊目からが利益。ただ、新刊を十冊入れて九冊売れるまでじっとしていることはまずない。空いた数冊の場所に次の追加を入れる。そしたらどうなるか。次の請求がやってくるのだ。いつまでたっても利益でないんじゃないかこれ。どうなってるんだ。

そんなこんなで新刊は減らない。古本は突然どさっとはいってくる。

いよいよ本の置き場がなくなってきた。本棚に収まりきらないどころの話ではない。ぱっと数えてもダンボール十個以上の古本が二階の寝室、階段、居間のはしこまで侵食している。床が抜ける。

磨いて値段をつけたものではできるだけすみやかにお店の本棚に出す。そうすると今度は入荷したての新刊の居場所がなくなってしまう。平積みの本の上に違う本が平積みされる。「本は積むと終わりますよ」名古屋からやってきた書店員仲間が恐ろしいことを口走って帰って行った。終わるってなんだ。「三月書房方式やな」と肯定的なことをいう人もいる。京都の老舗本屋さん・三月書房の平台には無造作に旬の新刊がボンと置かれている。これが不思議と欲しい本だったりする。が、うちの場合はそんなかつこいいものではない。ただ置いてあるだけ。下の本が見えないじゃないか。不親切極まりない。

倉庫がほしいですねえと誰にいうでもなく二ヶ月くらい言いつづけていると近所の小屋に出会った。「昔は染めた布を干してた小屋なのよ」と大家さんが言う。「でもねえ、大学生が急に住むってゆうて住みだしたの。二人くらい。だからガスと電気は引いてあるの」まったくわからないがんだかい歴史のある物件のようだ。そ

んな話をしていると突然、別の近所の人がかい本棚をくれると言いだした。おそるおそる、契約する前なんは分かってるんですけど本棚だけ先に置かせてもらえませんか？と言ってみる。「いいわよ、もう鍵預けておきますね」と返事。すぐにでかい本棚が設置される。床がちよつとべこべこしてて不安やなあと思いいながら契約書ができるのを待つ。

しばらくぼーっとしていると「東京から引越してきたんです。旦那が大工をしていて」というお客さんがあらわれた。え、と身を乗り出す。古い町家を直しながら住んでいるという。なんだそれは。ちよつとくわしく教えてくださいよ。さつそく倉庫にきてもらうことになった。

朝、店の前のベンチで待っていると大工さんが歩いてやってきた。奥さんと子ども一緒。「散歩にちよつといい距離でした」とかい。いい天気やなあ。鍵を借りっぱなしの倉庫。もう我が物顔で戸を開ける。床がねえ、とか言ってる間にサクサクと採寸が進む。手際が良い。

「棚とかはいらないんですか」と大工さん。あーと曖昧な返事をしつつどんなレイアウトにするか考え始める。壁際に棚があったほうがいいのか、横に何本か並べるのがいいのか。一年ほど前に彦根でのぞかせてもらった倉

庫は理想的やったなあ。綺麗にしてはったし本も整理されてた。あんな感じにできるかなあ。こっちにもスペースあるねえ。なんか使えるかなこの空間。いちばんたのしいなこの時間。とか思いながら雑草を抜いたり枯葉を掃いたりしている。隅にカリンの実が落ちていた。見上げると木が一本だけ生えている。黄色い実がいくつかみえる。とつてみると甘い匂い。手のひらがカリンの香りになった。ひらひらと手を振って大工さんの一家を見送る。

すぐに大家さんから電話があった。「あのね、いま不動産屋さんとはなしていて、ちよつとわたしではわからないので代わりますね。お話聞いてくださる？」はいはいと聞けばつまり契約書を作るにあたって不都合があり、解決するにはえらい額の負担が大家さんにかかる。なので貸せません、ということだった。なんじゃそりゃ。

ふりだしにもどる。でも在庫はもとにもどらない。出ていったお金ももどらない。おもしろいなあ。

# 遊歴と算家の汽水域

〔数学戯評の解説〕

芝野 浩貴

(地球探家)

2年間に亘る教育回顧の旅が終わった。具体的には数学雑誌『現代数学』の巻頭言である数学戯評寄稿者の任期を終えた。

3ヶ月に1回の執筆だから8回のテーマについて書いた。思いつきで書いたのではなく、8回で教育活動が網羅できるように数学と掛け合わせた。短い文に圧縮していて意味が不明なところがあるので、自分の整理の意味も含めてこの場で補足したい。国内の数学関係の雑誌は、『数理科学』、『数学文化』、『数学セミナー』、『現代数学』など豊富で、月刊誌、季刊誌がこなにあるのは世界でも稀である。

特に後者2つは学生時、教員時代にずっと愛読していた。数学セミナーの方の創刊は遠山啓が、現代数学の創刊は森毅が関わっている。原稿依頼を受けた時に改めて

創刊の精神を編集長の富田淳氏に尋ねたら、『数学文化』を後世にまで書物として残しておくように、という森毅の一言に先代の社長が共鳴したからということだった。コラムなので難しい数式は書いてはいない。

① 2018年4月号 数学しない「数学」

〔学校〕×〔数学〕

想像から創造へ。数学未解決問題の一つの P.N.P. を学校社会に翻訳すると生徒にどうやって数学遺伝子を引き継ぐかとなる。

② 2018年7月号 三大難問に挑んだブリキ算家

〔図書館〕×〔数学〕

研究室から数学は生まれるだけでない。そもそも数学は発明でなく発見するものだから、身近に数学は転がっている。司書時代の私と智頭の小板一実さんのやりとりより

③ 2018年10月号 数学的武道思考

〔部活動〕×〔数学〕

なんのために部活をしているのかを履き違えている教員は多い。競争を活かす教育と名誉心への付度は違う。教員は授業で勝負すべきだ。

④ 2018年1月号 担任学 十「数」函「数」牛函

〔担任〕×〔数学〕

働き方改革ばかりが強調され、生徒指導関係は事件が起こった時だけ取り上げられる。十牛図に学ぶ生徒指導。担任の仕事は面接である。

⑤2019年4月号 孤独を共有する

〔学び〕×〔数学〕

鳥取県が誇る文化遺産「専攻科」での主体的・対話的・深い学びへの先取り実践例。学び祭について。学びは人を繋ぐ。

⑥2019年7月号 あいだを旅する

〔旅〕×〔数学〕

江戸時代の遊歴算家山口和は1800キロ、全国を9回周り算額を教え歩いた。「数学は社会活動である」という信念を持ち世界放浪したエルディシユに魅せられる部分もある。歩くことと数学は大いに関係はある。古今東西の28名の著名人を引用して、いろんな「あいだ」を考える。

⑦2019年10月号 平成遊歴記

〔数学者〕×〔数学〕

サバティカルでもなんでもなく、自腹で参加し続けたので給料のほとんどはICME(数学教育世界会議)とICM(国際数学者会議)に費やした。結果的に貧乏生活を送ってるが、数学の魂が体に入ってるから、まあよしと

する。2つの大会に12回参加して出会った数学者との思い出。

⑧2020年1月号 私は菌になりたい

〔AI〕×〔障害〕×〔菌〕×〔数学〕

「脳ではない」とか「世界は存在しない」とかの本が流行ってるが、AIは人間の脳であるし、数学という世界は存在する。なんでも記号化して分類する癖をやめ、動物でも植物でもない菌に学んだりして、考えることと感じることを共生させたい。

以上が8回分の発行年月とタイトルと要約である。かつては人間はロボットにできないことはあると差異化していたが、今は同じ概念でAIにできないことはあると評論してる時ではない。

AIの方が人間にはできないことはあると評価してる立場である。そんな時に、脳化社会が経済に侵入するほど、格差社会になり、社会的共通資本やオートポイエーシスの重要性が説かれる。

宇沢弘文も河本英夫も鳥取県人である。元数学セミナーの編集長で亀書房の亀井哲治郎も鳥取県人である。数学のある鳥取に生きる。

## 再び幻の映画を尋ねて (前)

ムラカミヒロシ

フライングブックマン

古い洋画を二本、観た。どちらも、一九六〇年代の作品。一本は「地球は壊滅する」というSF映画。(冠に“トンデモ”が付く)今一本は「首のない馬」という、子供向けの実写版デイズニー映画である。

いずれも国内ではソフト化されておらず、CS放送もない、はつきり言って「忘れられた映画」である。筆者自身、今回の調査がなければ、記憶の彼方に葬り去ってしまったっていた作品である。

事の次第はこうである。

去年、半ば偶然のように、長年気に掛かっていた映画のひとつが判明した。これに気を良くして、今度は少しシステムチックに調べてやれ、と思い立った訳である。

対象は、生まれて初めて見た(と本人は信じている)

洋画である。地下のエレベーターから、二人の主人公が命からがら脱出するが、地上は火炎地獄であった、とい

うシーンだけを覚えていたという難儀なシロモノ。

先ず、ウィキペディアやらオールシネマやらを検索してみても、それらしいものは「地球の危機」(一九六一)と「渚にて」(一九五九)の二本と当りを付ける。年代的には、悪くないが、両方とも潜水艦映画である所が難点。地上の業火はともかく、地下から這い上る場面があり得るかどうか。

果たして、廉価版DVDを入手して見ると、違う。さて、どうする。

以前に、あるテーマで映画のリストアップをした時、頼りなつたのが「キネマ旬報」だった。かつて、筒井康隆も映画エッセイ(「不良少年の映画史」)の連載を始めるに当たって、キネ旬の完揃い求むの広告を出し、提供のあった大揃いを百万円で購入した。こと程左様に、活字時代には、最も信頼できるデータベースなのであった。

同誌は毎年二月に、前年の決算号を出し、ベストテンを発表する。併せて、国内で公開された、邦・洋画の全リストを掲載するのが習わしである。

この全リストを風潰しにチェックするのが、遠回りだが近道、そう考えた。実の所、問題にすべきは十年に満



たないのであるから、労力的に左程のことではない。ただ、タイトルで類推できなければアウトである。

案の定、探し始めたものの、仲々これは、というものに行き当たらない。二、三それらしいものを掲載号に当たってみるが、見事にハズレ。

キネ旬が駄目となると…で、考えた。

他ジャンルは兎も角、SFは比較的カテゴリーイズしやすく、単独で通史や評論集が出ている。専門雑誌もある。そこから攻められないか。

データブックとして使えそうな本が三冊あった。北島明弘『世界SF映画全史』、同『SFムービー史』、中子真治『超SF映画』である。著者が恣意的にチョイスしている本では駄目で、悉皆主義でなければ役に立たない。そういう点で、この三冊は条件をクリアしている。使い勝手が良かったのは、『超SF映画』。公開年順に整理され、データブックに徹しているのが有難かった。実に、購入から四十年目にして初めての通読であった。

一九五八年から一九六七年までで、三作品ばかりピックアップできた。

「ロスト・ミサイル」（一九五八）、「地球が炎にまつまれる日」（一九六一）、「地球は壊滅する」（一九

六五）の三本である。

ただし、前二作は、日本未公開。劇場で見られた筈はないので除外。結局、「地球は壊滅する」だけが残った。

念の為、キネ旬で再確認。確かにリストに載っている。どうやら見落としたものらしい。何にせよ、記事の掲載がなかったもので、これだけでは分からなかった筈だけでも。

「地球は壊滅する」は、アンドリュー・マートン監督のアメリカ映画。

ダナ・アンドリュース演じる科学者が、エネルギー問題を解決するため、地下のマグマを利用する実験を行う。核ミサイルを地下深くまで打ち込み、マントルの岩盤を破壊し、マグマの地上噴出を成功させる。

しかし、同時に、何百キロも離れたアジアで大地震が発生、連鎖的に巨大な地割れが全地球的規模で広がっていく。

これを阻止するため、地割れのコース上にある火山島の火口に水爆を投下し、進行を食い止めたかと思われたが、別方向から亀裂が始まり、地球上はあらゆる場所でマグマが噴出し火の海となる。（つづく）

## 鹿野は私のふんわり



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

いつかは韓国のパンソリを、いつかは新潟のNoisismを、  
と思っていた夢が十一月の「鳥の演劇祭」で二つとも叶っ  
た。中国と言えば京劇との思い込みは、北京の演劇大学  
や上海のプロ劇団の現代劇によって見事に崩され、韓国  
に続き今後は中国演劇が楽しみになった。他にも海外か  
らの劇団や様々なプログラムがあり、訪れた人それぞれ  
に感動があったことだろう。今年も観劇に加えて心に残  
る思い出がいくつもできた。

神戸にお住いのKさんが演劇好きで東京やロンドンへ  
も行かれることは、以前から知っていた。早速、「鳥の  
演劇祭」へのお誘いをしたところ、思いもよらぬ方向に

話が進んでいった。「実は、私は鹿野が大好きで……  
…」演劇よりも鹿野と聞いて一気に心が動きだしたKさ  
ん、20代後半に鹿野温泉病院で半年間の療養生活を送  
られたのだった。一日に二度温泉に入り、近所の農家の  
人と大根を引いたり、あんこたっぷりのお餅をいただい  
たり、親しくさせてもらったと。神戸生まれで神戸育ち  
のKさんは、子供の頃から田舎のおばあちゃんの家で虫  
や魚を取った友達の話を知っていたり、盆と正月に帰省する  
同僚たちを見て、いつもうらやましく思い、故郷や田舎  
に憧れていたそう。今回、思い切つて鹿野行きを計画  
された。演劇祭よりも思い出の地を訪れたいと「山紫苑」  
で宿が取れる日に合わせての2泊3日。蘇ってくる記憶。  
足の弱いKさんのために「山紫苑」の人ばかりか、たま  
たま入った喫茶店の人も劇場までの送迎を申し出られた  
そう。出会った人のやさしさは50年経ても変わってい  
なかった。そしてお湯も。後日、「有馬温泉よりええで」  
とこっそり教えて下さった。療養後に演劇愛好仲間と出  
会い、演劇のおかげで今日まで心身、特に精神を健康に  
保っている。

ファンの一人としては、鹿野、そして鳥取県内の一人  
でも多くの人に、一生に一度は「鳥の劇場」の公演を見  
てほしいと思っている。四国学院大学演劇専攻の学生た

ちによる『舞姫』を隣席で観た人は、会場まで車で2分だが、「鳥の劇場」の存在は知っていてもこれまで足を運ばれたことはなかった。森鷗外の『舞姫』ゆえに來られた。この企画は日・中・韓の学生による演劇交流で、彼らの舞台から得た私の感動を話したところ、翌日の学生演劇の当日券を気にされていた。「やったー、次は、必ず鳥の劇場の公演に行つてね」と心の中で願った。

「赤とんぼ荘」でお馴染みのたつの市からは、『赤とんぼよ永遠に』露風の母、碧川かた物語』を市民劇団の方々が見せて下さった。会場ロビーの雰囲気や舞台は手作り感と温かさがあり、そして何よりも三木露風の母親はこんなすごい女性だったんだ、愛情あふれる母、妻であるだけでなく、婦人参政権獲得を目指しての行動力と情熱に驚かされた。しかも鳥取出身なのだ。先の『舞姫』で知り合った人から、市民ダンスグループ「とりつとダンス」について話をしている時に聞いた言葉が思い出された。「鳥取の人はおとなしいように思われているけれど、実は違うのよ」確かに、かたさんに通じるものがある。かたさんの写真を見てもわかるように、鳥取の人の優しさに隠れてしまつて見えない部分なんだ。碧川かたを朝ドラの主人公に、という動きもすでに始まつている。

「鳥の劇場」では文化情報のチラシももらえる。予定変更して当日券を手に入れ、向かった先は十一月三日のとりぎん文化会館、『銀河鉄道の夜』だ。通りすがりに迷い込んだような、まさに銀河鉄道に乗つての旅だったが、この旅の間、指で拭うには間に合わずハンカチの出番がこんなに多くなるとは思つてもみなかつた。舞台じゃなくて私たちの社会そのものを見ているような、俳優さんじゃなくて、役を演じているのが誰かなんて関係なく、一人一人が個性的でかけがえのない役だった。一人一人を輝かせる演出とその演出に応えられる皆さん、見ている私たちもそれぞれが輝く星なんだ、そんな星でできてくるこの世界、鳥取。ここで生まれ育つた人も、縁あつて移つてきた人も、県外からちよこちよこ来る私のようなものにとつても、故郷となりえるものがここにあるのではないかとさえ思われた。「鹿野は私のふるさと」と言われたKさん。『銀河鉄道の夜』を見て、自分たちの手で自分たちの故郷をつくつていけるような気がした。「鳥取は私たちのふるさと」、終着駅には、岡野貞一先生、そして『音信不通』の「鳥取あれこれ」。

内田克彦

(地域研究家)

また、西修著『証言でつづる日本国憲法の成立経緯』では、「松本委員会に提出された各委員の私案を比較すると、古井私案は、民主主義の推進という点で出色の出来具合だったと評価できる。」としている。

ところが、矢部は、一九四六年三月七日付の『矢部貞治日記』に次のように書いている。

今日の朝、政府案としての憲法改正案が発表になっている。主権在民、天皇は統合の象徴といふことから、各面「ママ」僕らの主張していたやうな非常に進んだ案に近い。これは松本國務相のやった政府原案とは無縁のものに見える。いづれ、マック司令部から押し付けられたものに相違あるまい。

(承前)  
政府内に影響力があつたとされる矢部貞治の案と、松本委員会に提出された古井喜実の案について、波田永実氏は一九九七年発表の「矢部貞治の新憲法・戦後天皇制構想―日本国憲法成立期の国民主権論の一断面―」論文の第一章の中で、九項目にわたって比較している。即ち、国称、天皇制、統治権、政府、統帥権、枢密院、「ポツダム宣言」との関係、民主主義、改正手続の各項目について対照した上で、次のように述べている。

本質的な問題で両者のいちばん大きな相違は、古井はより現在の議院内閣制・象徴天皇制に近いものを構想し、矢部は「天皇統治ヲ前提シ、立法、行政、司法諸権ノ総覽者トシテ天皇ノ地位ヲ犯サス」とするが、「実権ヲ行使セス、国家非常ノ場合ニ統一ノ中心タルコヲ期待ス」る、としていることであろう。

矢部が前年一〇月三日に作成した案は、「僕らの主張していたやうな非常に進んだ案に近い」と記す「政府案としての憲法改正案」と比べて乖離があると疑問を抱いていたが、大谷伸治氏の二〇一六年発表の「松谷誠陸軍大佐グループの活動―新憲法を先取りした「団子坂研究会」―」論文によって疑問が氷解した。大谷氏が名付けた「団子坂研究会」とは、敗戦直前に松谷誠陸軍大佐から

「終戦に関する具体的な政策研究」を依頼された、矢部も加わったブレイングループが、敗戦によって一度解消したものの、戦後直後に再び組織され、一九四五年一月一九日に一回目を開いた研究会のことである。計一五回も開いている。

大谷氏は、防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室に残された史料の中から、一九四六年一月付の「建国綱領(案)」という文書に注目している。特記すべき項目を再引用する。(注、「中略」とあるのは著者が、(略)とあるのは再引用者が挿入したものである)

#### 一、国際関係―平和国家ノ建設

(一)武装ナキ社会正義ニ基ツク世界秩序建設ノ基石トシ  
テ日本国家ヲ建設センガ為左ノ如キ国際秩序ヲ希  
ス〔中略〕

(二)日本ハ成可ク速ヤカニ国際聯合ニ参加シ得ル如ク努  
力ス

(三)日本ハ一切ノ国際紛争ニ関与セズ

二、個人―人権ノ保障

(一)人種、宗教、思想ノ如何ニ拘ラズ、各人ハ人権トシ

テ

左ノ基本的権利ヲ保障サル

1. 各人ハ労働スル権利ヲ有ス(略)  
2. 各人ハ休養スル権利ヲ有ス(略)

3. 各人ハ教育ヲ受クル権利ヲ有ス(略)

4. 老年期及ビ疾病時ニ於ケル物質的安定ヲ享有ス  
ル権利ヲ有ス(略)〔中略〕

(三)女子ハ社会、政治、経済、文化ノ各生活領域ニ於

テ男子ト平等ノ権利ヲ賦与サル(略)

三、国家―民主国家ノ建設

(一)民主集中ノ象徴者、民族文化ノ保持者トシテノ天  
皇制ノ維持

(二)参政権、言論、出版、集会、結社等ノ自由ノ保障

〔中略〕(略)

大谷氏は、「この素案は政治学者の矢部貞治元東京帝  
国大学教授が作成し、その後、松谷らで討議し完成させ  
たと推測されるものである」、「この綱領は、憲法案に  
類するものである」とし、「非常に先駆的といえる」と  
述べている。発表された憲法改正案が多くの人にとって  
驚きをもって迎えられた中で、矢部は、一〇月三日の案  
の後、どういった論議の果てに「僕らの主張していたよ  
うな非常に進んだ案」に到達したのであろうか。

(以下、続く)

二〇一九・一一・二三

## 蒼のノクテュルヌ

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

滔々と流れ行く楽に名前も知らなひ、何も解らなひ儘夢中につて、之はまう恋に似てゐる？ 舞踏会で初めてあの少女に逢つたロメオ？ …しかし本来さうあるべきなのぢやなひの？ 今しみじみ思ふ。

我が国のやうに、先づ作曲家やら、その生ひ立ち、曲の形式等蘊蓄を一通り頭ごなしに教へられ、押し付けられ「此の曲はかう聴く、斯く味はふべし」…教養として覚へさせられ、好きなのか？ 恋するかだうかは一番後回しなんて！ オカシイよ敷居の高ひ、気取つたクラシック音楽鑑賞の常識を問ふ「通」の諸君、前時代的な家と家のお見合ひのやう、つくづく。

…曲の名は夜想曲※、ボロディン作第2弦楽四重奏曲の第2楽章。

夢みるやうなとろける調べは、今夜も僕らを真夜中の幻想の先へその亦先へと誘つて呉れてゐる…。

2019. 10. 20

夢見るやうな調べ… 其れはチェロが主旋律朗々と奏でる弦楽の・以外何も解らなかつた。曲名、作曲者。調性や拍子もよく感じてみる前にいつも唯夢見心地。風のやうにどこから来てどこへ行くの？ つひて行ける翼が欲しひ。神秘的と云ふには余りに爽やか過ぎる語り口、典雅で異国的。いったひ此は何処の国、何時の時代に書かれたもの？ でも何となく「ロマン派」？ 誰が弾ゐてる？ NHKの或るラヂオ（FM）番組主題曲の話… 未だ少年だった僕。

或る時は妙なる調べに胸膨らませ、亦或る時はすつかり微睡んでしまつてゐた…、兎に角「なんて美しひ旋律！ 世の中にこんな綺麗な音楽が在るの？」

今回のディスクは、ボロディン弦楽四重奏曲第二番ニ長

調 (1881) ① プラハ S Q (rec. プラハ 1981)

② リムスキー・コルサーク Q

③ ボロディン S Q (rec. 1962)

④ 「ノットウルノ」のみ (弦楽オーケストラ版) B

ノヴォトウニー指揮プラハ室内管弦楽団

※ノクターンは、我が国ではショパン等傑作のイメージから、「ロマン派以降、ピアノ独奏曲の一ジャンル」との固定観念頗る強ひがそんな事は毛頭無ひ。此の曲のやうに弦楽の為であったり管弦楽だったり、時には声楽でさへも。

いずれにせよ幻想的自由な様式でフィールド→ショパンよりかなり以前、モーツァルトに大編成管楽合奏の為の例が幾つかありボツケリーニの二・五・六・八重奏、シューベルトのロ三重奏も…と既に古典派時代器楽的スタイルを確立してゐる。



# 書くことについて書かれた小説

土質 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

として)。

本当に要るものだけ、を残したら、「書くこと」を書くことになりました、ということか。これも奈良さんの言葉を借りると「オブセッション」。強迫神経症という病理とも整合する。

ワクサカさんはまた、書いてるうちに、なんだか知らない道に出ってしまったぞ、という、物書きであれば共感できる感じ、についても書かれているが、これについては僕も音信不通で、「生理的というか、作者もなんでもんなものが自分の中から出てきたのかわからない、という感じの一筋縄では行かない文章が面白い」と、似た様な感興につき書き、肯定している。しかし、最近読んだ、物語の最後では作家となる女性を主人公とした小説に、「彼女は一つ改竄したくもなければ、無効化したくもなかった。だからことばで表現するという愚を避ける。そしてこのことは、後年も、彼女の職業上の永続的難問となるのである」、という一節があり、あることを表現しようとしていて、似ても似つかぬものが産み落とされることを諸手を挙げて肯定してもいいものか、と、やや足踏みもする。書く、というのは、意のままにならぬ生き物の様に魅力的でありながら、つくづく信頼の置けない道具でもあるのである。

歳を取り、しずしずと全てが終焉に向かって行く感じも然程悪いものではない。

全てがキチンと片付いてないと気持ちが悪い、強迫神経症気味な気質と関係があるのかもしれない。まだ使うかな、などと少し躊躇いながらも、最後に使ったのはいつだったというんだよ、などと自問しながら捨ててしまい、清々するのと似てなくはない。

段々と、本当に要るものだけが残って行く。

三十九号でワクサカさんが、自分はこの掲載で「書く」ということを中心に書いている、とお書きになっっているのを拝見し、あ、自分もそうだな、と思う(それが奈良さんの Biotope という旗印と合致しているか否かは不問



同じ小説に、「完全な小説とは完全な虚構の謂である。けれども、明らかに虚構、完全に虚構である作品もまた——ここが問題の核心であり摩訶不思議なところであるが——真実を含んでいることがある」ともあり、これにも同意を禁じ得ないが、同時に、これは前述の「こ」とばに対する懐疑」とは矛盾している様にも思われる。なぜなら、完全虚構を構築するにあたり、「書いてるうちに、なんだか知らない道に出ってしまったぞ」、というプロセスは不可欠である、と思うからである。意識的に完全虚構を構築しようとすると、これも同じく小文中で触れた、“Contrived” という状態に陥る。通常、「自然」、「わざとらしい」と訳される言葉だが、英語の辞書を引くと、“Obviously planned or calculated; not spontaneous or natural; labored” とより重層的である。

同意を禁じ得ぬことの証し、という訳でもないが、僕も書きかけの小説に「……その縛りの中で奔放に構築した虚構にリアリティを持たせることが、私にとっての小説を書く意味、だと思ふ。もし小説を書くことに意味があるとすると」と登場人物に云わせている。

「書く」という道具は、真実をありのままに写し取る、

という作業には不向き、ということであろうか。

ある意味、潜在意識に潜り込み、自動筆的に記された文章にこそ、普遍的な「真実を含んでいることがある」ということなのか。

小説のタイトルは “Mothering Sunday”、<sup>2)</sup> Graham Swift という七十歳の英国人作家による。

本当に要るものだけ、を残したら、「書くこと」を書くことになりました、という風に出上がった作品なのであろうか。

# クリムトとあんかけスパゲティ

あきの素生

(くうねるめがね)



クリムトが好きだ。

好きになっただきっかけは忘れてしまったけれど、最初に出会った作品は覚えている。高校の美術の資料集に載っていた「ひまわりの咲く農家の庭」だ。高校生のうちは、誰の描いた絵か知らなかった。ただ、素敵な絵だなあと思った。画面が色とりどりの花と緑で埋め尽くされていて、その中であってやはり、ひまわりがひととき目を引く。ひまわりだけが、によきによきと立ち上がって見えるのだ。それに、ひまわりを含めた一輪一輪の花が、それぞれ魅力を湛えているように感じた。作品を知ってから少し経ち、授業で模写をすることになったとき、この絵を選んだ。絶対大変、とも思ったけれど、どうしても描いてみたかった。そのとき、この絵以上に、惹かれる

ものがなかった。描き始めると、案の定大変だった。まず、ひまわり以外、どれが立体で、どこが平面なのかわからない。植物と植物の境目がわからない。まあ、見たとおり描けば（描けるわけではないけれども）なんとかなるのでは、と思って描きすすめるが、花だけでなく葉っぱの一枚一枚にまで表情があつて、緑にも幾種類もの緑があつて、青い花にピンクの点々があるところなんてどうしたらいいのとか、思い入れがあるばかりに手が抜けず、描いても描いても終わる気がしなかった。あるうことか、提出期限は2学期に持ち越しとなり、時間があればあるだけ手をかけてしまい、夏休みの大半を模写に捧げることになった。特にうまくもなく、ほめられることもなかった絵だけれど、自分としては「やり切った」という気持ちが強く、今でも気に入っている。

クリムトを好きになったあと、自分が模写した絵が、クリムトの作品だと知って、余計好きになった。偶然の出会いを運命と思いたくなる乙女心である。

そんなクリムトの美術展が2つも開催された今年。気づいたときには身動きが取れず、仕方がないと諦めていたのだが、「クリムト展 ウィーンと日本 1900」に行っただ方の感想を見聞きするにつけ、滅多にない、せつかくの機会をふいにしたのでという思いがどんどんふくら

んで、悲しくなった。ウイーンは遠いのに。

なので、巡回展だと知ったときの喜びはひとしおだった。詰めの甘い私には、自分にサプライズを施す能力が備わっているようだ。

愛知県の豊田市美術館。すべて鉄道で行こうかと考えていたところ、名古屋駅から美術館まで高速バスが出ているようだった。名古屋に着いてから、バスが出るまで少し時間があつたので、バス停の場所を確認しに行ったり、ナナちゃんを見上げたりとのんびり構えていたら、あつという間に出発時間が近づいてきた。きしめんを食べようと思っていたのに。フォーやフェットウチーネなど、平べったい麺に目がない。せつかくの名古屋、きしめんを楽しみにやってきたのだ。さつき見かけたきしめんの店はどこだと名古屋駅の構内を来た方向に早足で戻ったが、時間が刻々と近づいてくる。バスは逃せない。涙を飲んできしめんを諦め、近くにあつた、早く料理が出てきそうなカフェ風のお店に入ることにした。

目玉のメニューは、「鉄板ナポリタン」と「あんかけスパゲティ」。魅惑の響きだ。どちらも捨てがたかったが、迷う時間もなく、白い服を着てるから、という理由で、ナポリタンをやめ、「あんかけスパゲティ」にした。出てきた「あんかけスパゲティ」の「あん」は、ケチャップ色であった。たつぷりのあんに、太めのスパゲティや

ウイナー、玉ねぎ、ピーマンといった具材が、絡めておくれと言わんばかりに盛ってある。慎重に麺と具をあとに絡め、口に運んだ。とろみのあるあんは、少しぴりつとするけれど、懐かしくやさしい味わいで、朝早くに家を出て、はるばるやってきた私のお腹を満たしてくれた。太めの麺が、やわらかく、あんによく絡んでよい。平べったくない麺も、おいしい。

次来たときは、必ず「鉄板ナポリタン」を食べようと心に決めて、店を後にした。

判断は功を奏し、高速バスにぎりぎり間に合った。名古屋の街並みを眺めたり（残念ながらお城は見えなかった）、本を読んだりしながら、バスにおまかせで、豊田市に向かった。

次号につづく。

## 春の帽子



ドラメリア (座敷わらし)

クリスマスケーキの季節が来た。

わたしが小学校に上がったばかりの頃、母はいつも一冊のレシピ本をお手本にしてお菓子を作ってくれ、わたしはそれを眺めるのが好きだった。苺のケーキ、ババロア、アップルパイ……美味しそうな洋菓子の写真で溢れたその本を、何度見ても飽きなかったものだ。

中でもわたしの心を捉えて離さなかったのは、「スプリングハット」……iyg 春の帽子、と名付けられた、丸いドーム型のケーキの全面に花を模したピンク色や白のクリームが絞ってデコレーションされた華やかなものだった。今なら「映え」というのだろうか、幼いわたしはその美しさに夢中になり、作ってくれるようことあるごとに母親にねだった。ねえ次はこれを作って、お願い、一生のお願い……。

最初は渋っていた母親も、わたしのあまりのしつこさに根負けしたのか、ついに作ってくれることになった。しかし、わくわくしながら迎えたケーキは、想像したも

のとは大きく違っていた。白いドームにトゲがまばらに植えられた、さびしいサボテン。あれ？

あの華やかさはどこへ？

……大人になった今ならわかる。なんと手のかかるものを頼んだことか。色味を変えながら隙間なく均等にクリームを絞っていく、果てのない単純作業。母はきつと大変だったのだ、とても。内心の落胆を隠して喜んでみせたあのとき、わたしは優しい嘘というものを身に付けたように思う。

手作りケーキと聞くと、今でもよくこれ进行いだす。半分だけ春を纏った、あのお手製の帽子を。



### ・編集後記……

噂の高級生食パンを買ってみました。白くて、ほんのり甘くて、もちもちしていて、癖になりそうな味でした。なるほどこれが……と納得。もともと、食パンは生派です。

ドラメリア (編集長)

十一月二七日に「知のカフェ」の方々に招かれ、鳥取大学で「『本屋』の仕事」というお題でお話しました。締めくくりに今井書店の高木善祥さんが「奈良さんは、おだやかなアナキスト」と評されたのが心に残りました。

奈良敏行 (発行人)